

日本の優れた指導技術を必要とする人々に伝えたい



ジャイカ
JICA海外協力隊
とだかまさ
戸高 将 さん (63歳)

JICA（独立行政法人国際協力機構）海外協力隊は、開発途上国の国づくりに貢献できる人材を海外に派遣、現地の人々とともに生活し、同じ目線で途上国の課題解決に貢献する制度だ。今年8月から2年間、海外協力隊として南太平洋に位置するパプアニューギニアに派遣される元小学校教諭の戸高 将さん（現在住）に話を聞いた。

「パプアニューギニアの人たちに、自分が持っている技術を伝えたい」と話すのは、元小学校教諭で、JICA海外協力隊として8月からパプアニューギニアに赴任する戸高将さん。

高校時代、社会科の授業で開発途上国支援に興味を持った戸高さん。偶然目にした協力隊募集のポスターでアフリカで活躍する隊員の姿に心を奪われた。

「このポスターとの出会いで、途上国の人々のために力を尽くしたいと心が決まりました。」

大学時代に協力隊に応募するも、家庭の事情などで一度は断念。しかし、毎年募集要項を取り寄せるなど、その想いを持ち続けてきた。

転機は、次男の光ひかるさんにアジアの中学・高校で日本語の授業の補助や日本文化の紹介を行う「日本語パートナーズ」制度を勧められたこと。戸高さんは定年より1年早く小学校を退職して応募。令和元年8月から7カ月間ベトナムで活動した。

戸高さんが現地の教育現場で

感じたのは、日本の教員の指導技術の高さ。勉強だけでなく交通安全や道徳など幅広く教えることが日本社会の基礎を作っていると感じ、自身も「その一翼を担ってきた」と教員生活の意味を振り返ることができた。同時に「自分の指導技術を必要とする国の人々に伝えたい」と強く感じ、40年来の夢である協力隊へ応募。パプアニューギニアへの派遣が決まった。

現地では、子どもたちに理科や算数を教えるほか、教員の指導力向上にも取り組む予定だ。教材などの不足が予想されるが、「自分の本当の力が試される」と意気込む。

任期を終えた後は、自身の経験を小林の子どもたちに伝えたいとも話す戸高さん。「私とポスターの出会いのよ

うに、海外に目を向ける種をまけたらうれしいです」。

「今が青春真っ只中」だと笑う戸高さん。2年間の任期の先まで見据えるその目は、いきいきと輝いていた。

小林小学校で教え子たちと。教員生活の多くを市内の小学校で過ごした戸高さん。同僚や友人、保護者から教師として育ててもらったと振り返る

ベトナムでの教育活動を経て、これまでの仕事の意味に気付くことができた戸高さん。現職の先生たちにも、海外で教えるを経験してほしいと話す



小林

こばやしびと
Vol.115